

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520710
 研究課題名 (和文) 日本華僑社会における伝統文化の再構築と地元との関係
 研究課題名 (英文) RECONSTRUCTION OF TRADITIONAL CULTURES IN OVERSEAS
 CHINESE SOCIETY AND RELATIONSHIP WITH LOCALS IN JAPAN
 研究代表者
 曾 士才 (SOU SHISAI)
 法政大学・国際文化学部・教授
 研究者番号：10196991

研究成果の概要 (和文)：日本における華僑集団は日本生まれ、日本育ちの世代が中心となり、地元社会に開かれた集団になるなか、文化資本としての伝統文化の共有を確認することによって、集団としては結束力を維持、強化し、個人としては、中国人でもなく日本人でもない、華僑としてのアイデンティティを模索していることが、函館、横浜、神戸、京都、長崎、福岡、熊本、久留米などにおける調査によって明らかになった。

研究成果の概要 (英文)：The generation born and bred in Japan is now playing primary role in the overseas Chinese society in Japan which has become open to Japanese local communities. The research done in Hakodate, Yokohama, Kobe, Kyoto, Nagasaki, Fukuoka, Kumamoto, Kurume, and the rest reveals that as a group, people maintain and strengthen the solidarity with the members by espousing the concept of traditional cultures as cultural capital, and as an individual, they seek the identity as an overseas Chinese which is neither Chinese nor Japanese only.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1600,000	480,000	2080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：移民、華僑、エスニシティ、伝統文化、ネットワーク、共生

1. 研究開始当初の背景

日本華僑の歴史は 1859 年の安政の開国から数えて 147 年になる。今や華僑社会の担い手は日本生まれ、日本育ちの 2 世、3 世の時

代になっている。言語、生活慣習など客観的屬性においては、限りなく日本への同化が進む一方で、長崎、神戸、横浜の中華街などでは、地域振興を目的とした日本人店主と共同

の組合組織が、中国の伝統行事に想を得た春節祭など新たな「伝統」を創出している。華僑社会におけるこうした伝統の再編・創出は、実利を目的とする合理的な戦略という側面を持つとともに、自らのアイデンティティを再強化させるという側面も持っている。

日本華僑が自らのアイデンティティの再強化を図る動きは祭祀や芸能の分野だけでなく、日本華僑史の掘り起こしと記録化（王良主編『横浜華僑誌』財団法人中華會館 1995年、中華會館編『落地生根—神阪中華會館と神戸華僑の百年』研文出版 2000年、陳焜旺主編『日本華僑・留学生運動史』日本僑報社 2004年など）、関係資料の収集と展示（神戸華僑歴史博物館 1979年開館）、有形文化財の保存と再建（1892年創建の横浜中華義荘地蔵王廟修復など）という形にもなって現れている。

日本華僑社会におけるこのようなエスニシティ活性化の背景には、日中国交正常化による本国と日本との関係改善、交流増大があるが、移民集団としてみた場合、日本華僑が第3世代に入り、日本に定着したことが一番大きな要因として考えられる。日本華僑が地元社会に開かれた集団になるなか、文化資本としての伝統文化の共有を確認することによって、集団としては結束力を維持、強化し、個人としては、中国人でもなく日本人でもない、華僑としてのアイデンティティを模索しようとしているように見受けられる。このことを各地の華僑社会における実地調査を通じて実証的に明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

(1) 全国における日本華僑史の掘り起こしと記録化、関係資料の収集と展示、有形文化財の保存と再建、無形文化財の維持と創出にかかわる華僑の意識を明らかにする。

(2) 全国の中国人墓地の実態調査を行い、華僑の共有財産としての墓地の実態および地元との関係を明らかにし、地域間の差異とその原因を探る。

(3) 祭祀・芸能分野と葬礼・墓制分野の調査結果をつき合わせて、地域間の差異が同じようにみられるのか、2つの分野で異なるのかを考察する。

(2)は従来の研究になかった視点であり、研究結果は日本華僑自身にとっても有益な知見となる。本研究全体の成果は、日本華僑のエスニシティ研究への学術的寄与と日本の内なる国際化への社会的貢献が期待される。

3. 研究の方法

(1) 現地調査と文献研究に基づき、伝統文化の再構築という視点から日本華僑の動態を考察する。

(2) 日本華僑史の掘り起こしと記録化、関係資

料の収集と展示、有形文化財の保存と再建、無形文化財の維持と創出にかかわる動きを現地調査し、関係者への聞き取りを行う。

(3) 研究代表者が主に葬礼・墓制、信仰習俗に焦点を当て、分担者が祭祀、芸能、ネットワークに焦点を当てて調査研究を行う。

4. 研究成果

(1) 曾士才は①華僑史の掘り起こしと記録化、資料の収集と展示、有形文化財の保存と再建、無形文化財の維持と創出にかかわる華僑の意識、②各地の中国人墓地の実態調査を通じ、墓地と華僑、地元との関係、地域間の差異とその原因を明らかにすることに努めた。

①函館の中華山荘（中国人墓地）、中華會館、長崎の稲佐国際墓地（埋葬者が半数が中国人）、唐人屋敷跡の福建會館、時中小学校（現在は時中中国語教室）などの施設について、関係者へのインタビューと文献収集を行った。日中関係や華僑社会内部の変化に左右されながらも、華僑全体の文化財として守ってきた歴史と関係者の意識が明らかになった。

函館の華僑總會会長、中華會館理事長のC.J氏、中華會館の理事であり、餃子店を営むL.S氏、函館一のバーガーショップを営むO.Y氏、長崎の福建會館理事長C.T氏、墓地管理委員会委員長Y.C氏らの聞き取りからは、地域に根ざし、地域に開かれた姿勢について理解を深めることができた。特に、長崎崇福寺で開催される普度勝会（盆行事）の調査を通じ、担い手である福建華僑が中国の伝統行事を守ってきた一方で、崇福寺の実質的な檀家組織となるなど、地元社会に深く根ざしている実態が明らかになった。

一方で、これら文化財の維持、管理が大きな課題になっている現状も明らかになった。日本華僑が地元社会に開かれた集団になるなか、逆に華僑団体の会員数の減少、伝統行事の後継者難が起こっている。特に、函館や長崎など華僑の足跡が最も早い地域ほど、華

僑関係の歴史的建造物や墓地など共有財産の維持、管理に並々ならぬ努力と苦勞が伴っている。維持、保存を続けていく上で、地元との連携を模索する議論も一部に出ていることを知った。

②移民社会にとっての「死」の処理という観点から華僑・華人の墓制、葬制について調査した。日本での変化、長崎、函館、京都（宇治）それぞれの地域差があることが確認できた。管理面での特徴を挙げると、17世紀初頭に埋葬がすでに始まっている最も古くからある長崎の稲佐国際墓地では、華僑側の墓地管理委員会が地元ボランティアの協力も得ながら管理している。函館の中華山荘では、函館華僑社会における勢力地図の塗り替えによって、現在の主たる勢力である福建集団（福建北部の福州幫）が集団とは無縁の人びとが埋葬されている墓地を華僑の共有財産として維持、管理にあたっている。先行研究がなかった黄檗宗本山宇治市万福寺内の京都華僑霊園については、各区画の形態と特徴、埋葬法、墓碑、墓誌などを調査し、時代別、出身地別に分析するための基礎データを収集するとともに、墓地の使用権をめぐる黄檗宗本山と京都華僑の間で起こった訴訟事件の書類分析を通じ、霊園が華僑の共有財産と位置づけられていることが確認できた。また、江戸時代から黄檗宗末寺として関帝を祀っている関係から、明治時代から華僑の信仰を集めてきた大阪市天王寺区の清寿院を調査し、本院が京都華僑霊園創設まで大阪華僑の菩提寺として機能していたことを確認した。

(2) 王維は九州華僑および函館華僑のライフヒストリーを聞き取り調査するとともに、華僑の若い世代と地域社会との関係という視点から、長崎ランタンフェスティバル期間中に調査を行った。調査の結果から次のよう

なことが明らかになった。

①日本華僑においては、中国の伝統的な家族形態、いわゆる宗族のような直系親族は少ないが、結婚によって生じる姻戚関係が強く機能している。たとえば、戦前において呉服の行商を営んでいたため、全国津々浦々にその足跡を残した福建華僑の日本におけるルーツともいえる九州では、福建華僑間に姻戚関係が結ばれ、相互扶助の絆として大きな役割を果たしてきた。長崎、福岡、熊本、久留米において老華僑から移住の歴史とそのネットワークに関する聞き取り調査を行ったが、劉、陳、葉、翁、林、張、鄭姓など有力な一族の殆どが主に2世の時代に姻戚関係を結んでおり、そのことが彼らの団結力と経済的基盤を強固なものにし、家業を拡大するのに役立ってきた。そして、そのネットワークは九州のみならず日本全国に広がっていることが明らかになった。

3世の時代になると、日本社会での教育と就職のチャンスが広がったため、彼らの結婚相手は日本人であること多くなり、しかも横浜や神戸など中華学校がある地域を除いて、3世の大半は中国語ができない。日常生活や考え方がほとんど日本人と変わらず、日常的な付き合いも親戚よりむしろ会社関係や居住している地域のコミュニティの人たちのほうが主になっている。しかし、親族や姻戚関係を通じて、自分達のルーツやアイデンティティを確認しており、こうした人間関係が精神的な支えになっている部分もある。

②新地中華街は40前後の店舗からなるが、華僑と日本人との割合はほぼ半々である。長崎ランタンフェスティバルの前身である燈籠祭は新地中華街の門の完成一周年を記念して1987年に開催されたが、燈籠祭の成功は新地中華街の華僑と日本人との結束力の賜物であった。しかし、1994年に中華街の

燈籠祭をベースにして市のイベントとして長崎ランタンフェスティバルを始めた当初、中華街側にも周辺の商店街側にも抵抗感や違和感があった。双方の青年層はもともと顔見知りであり、幼馴染でもあり、じっくり話し合いを重ねるなか、長崎を思う気持ちは同じであることに思い至り、お互いに協力するようになった。そして、ランタンフェスティバルの拡大につれて、多くの商店街や地域団体が参加し、横のネットワークが作られていった。

15年を経た今日、新地中華街や地元商店街では経営者の世代交代が進むなか、祭りによって築かれた、華僑と日本人の枠を超えた地域社会のネットワークが機能し、イベントの一層の充実や会場の拡大など、新たな展開を見せていることがわかった。新地の2世や3世など若い世代は、大学進学や日本の会社への就職により一旦は中華街を離れるか、他所での料理修行を終えてすぐに店に入ったため、ランタンフェスティバルに係ることが少なかった。しかし、次第にイベントの実働部隊として参加するようになり、親の世代の絆が子の世代にも引き継がれるようになった。新地だけでなく長崎市内の若い世代の華僑たちは長男坊の会や次男坊の会を組織して親睦を深めているが、一方では自分たちのルーツや華僑への関心が高く、一方では地域社会のネットワークにも高い関心を示していることがわかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 曾士才、華僑の民俗信仰、論集・日本の民俗信仰、査読無、2009、211-216
- ② 廖赤陽、王維、長崎的商業ネットワークと新族性、論集・錯綜於市場、社会与国

家之間、査読無、2008、233-256

- ③ 王維、廖赤陽、在日福建移民の社会組織及其ネットワーク：以福建同郷会の活動為焦点、劉宏編、論集・海洋亞洲與華人世界之互動、査読無、2007、225-238

[学会発表] (計3件)

- ① 王維、Localized Culture and Japan's Tourism: A Case Study on the Alien Culture and Traditional Culture, The 16th World Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES)、2009.7.30、雲南民族大学(中国)
- ② 王維、日本華僑的傳統和文化、台湾政治大学民族系、2009年3月13日、台湾政治大学
- ③ 曾士才、日本華僑社会における傳統文化の再構築と地元との関係、法政大学国際日本学研究所・第2回東アジア文化研究会、2007年11月14日、法政大学国際日本学研究所セミナー室

6. 研究組織

(1) 研究代表者

曾士才 (SOU SHISAI)
法政大学・国際文化学部・教授
研究者番号：10196991

(2) 研究分担者

王維 (WANG WEI)
香川大学・経済学部・教授
研究者番号：10322546